

生徒が主体的に発信し，相互理解を深める能力の育成

—その3—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

須田 智之・秋元 佐恵・阪田 卓洋
多尾奈央子・高橋 深美・八宮 孝夫
山田 忠弘

生徒が主体的に発信し、相互理解を深める能力の育成

—その3—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

須田 智之・秋元 佐恵・阪田 卓洋
多尾奈央子・高橋 深美・八宮 孝夫
山田 忠弘

要約

今年度は本校 SSH 研究指定校第4期の三年目である。研究開発課題は「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習システムの構築と教材開発」となっており、その研究の柱の一つが「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習の教材開発と実践」である。

SSH 第3期以来、本校生徒による日本国内外における研修や、英語での研究発表の機会を設けている。今年度も、台中高級第一中学校研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）、他校 SSH プログラムによる海外派遣（台湾（高雄））等のプログラムが実施されている。これらのプログラムは生徒の間に定着し、安定的に推移している。

英語科では、海外の文化を広く受け入れ、国際社会に向かって発信する能力の育成を目指す教育活動を継続するとともに、普段の授業を通じて生徒が主体的に学ぶ学習環境作りを引き続き探求している。

この一環として、英語科では外部講師によるワークショップ、講演会を実施するとともに、イングリッシュルームを活用して、生徒の発信力の向上に努めている。

1. はじめに

1.1 英語科の授業構成

本校英語科では、中高6カ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6年間で基礎期[中1・中2]・実践期[中3、高1]・発展期[高2・高3]という3段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導を行っている。

各学年の授業は以下のとおりである：

- 中学 「英語」 4時間（LL・TT 各1時間を含む）
- 高1 「コミュニケーション英語 I」 3時間
「英語表現 I」 2時間（TT1+LL1）
- 高2 「コミュニケーション英語 II」 4時間
（TT 2時間を含む）
- 高3 「コミュニケーション英語 III」 3時間（選択）
「英語表現 II」 2時間（選択）

本校英語科ではどの学年、科目においても「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を共通理解として指導にあたっている。

1.2 英語科の取り組みの指標

本校の教育目標は『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」ことである。また、SSH 研究開発課題として「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成」が標榜されている。そのため、英語科では発信力・プレゼンテーション能力の涵養を念頭においた教育活動を行っている。

本論では、今年度の英語科の取り組み、および国際交流の実践について述べる。

2. 各学年における取り組み

2.1 中学1年生（73期） 担当：須田智之

2.1.1 はじめに（基礎期のスタート）

筆者が中学1年生の英語授業を担当するのは、66期、70期に続いて3サイクル目である。過去の経験と反省

を生かし授業を展開することを心掛けている。

最近の中学1年生の生徒たちは、小学校で英語の外国語活動を経験してきてはいるものの、アルファベットの読み書き、すなわち文字を介しての「読むこと」「書くこと」を含んだ本格的な英語学習が始まるのは依然として中学校からである。英語という新しい言語を習得する過程において、生徒たちが英語に興味を持って自主的に学習を進めていける工夫、すなわち興味深い教材でクラス全体を惹きつけ、習得に十分な課題・活動を課し、習熟度の低い生徒たちには個別対応をする、といった英語学習全体のデザインが求められているといえる。

また、本校では入学後間もなくすると塾などで英語学習に取り組み始める生徒も多い。しかしながら多くの場合、通塾の理由は「英語を学びたいから」「英語が好きだから」というよりは進学校独特の通塾文化によることが多い様である。英語は大学入試科目の一つであり、その突破には語彙や構文、文法知識の詰め込みは確かに必要である。普通の授業では、こうした生徒たちの持つ知識を引き出しながら、実際に英語での表現につなげていく必要があるといえるだろう。

この様な状況の中で、本校の英語授業の最終目標は「コミュニケーションの手段としての知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考え、実際の授業を組み立てている。

2.1.2 授業での取り組み

英語の週配当時間4時間は3つの要素から構成されるが、筆者の担当は「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2時間と「ALTとともに実際に英語を使ってみる時間」の1時間である。最後の「LL教室で聴解能力の訓練をする時間」の1時間に関しては、同僚の山田忠弘教諭に後述して頂く。以下に授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業（週2時間）

4月の入学当初には、まずは教科書を使わずに音声中心の授業を実施している。教室内など身の回りの物を英語で表現し、英語での自己紹介スピーチに取り組みさせるなどした後に文字指導を開始するようにしている。文字指導の際には『くちぐせ音ペン』(FLA)を使わせて頂いているが、生徒たちはアルファベットの大文字・小文字から身近な語彙まで、楽しみながら英語の文字を書くことに慣れていった様子であった。

その後は *New Crown English Series I* (三省堂)

を教科書として使用し、生徒たちとの英語でのやり取りを大切にした授業を心掛けている。題材の扱いには軽重をつけ、時には題材の背景知識に関する資料や動画などを紹介するなどの工夫をしている。

また、音声面強化と **Warming-up** を兼ねて、授業の冒頭で英語の歌を多数紹介している。また、特に今年度からは、文法事項の明示的な説明を歌の歌詞を用いて実施するように心掛けている。

(2)ALT とのティームティーチングの授業（週1時間）

ALT のティームティーチングの授業では、教科書ではカバーできない日常的な単語を多く取り上げて語彙力増強を図りつつ、*Talk and Talk 1* (正進社) を使用して文法事項の導入を実施している。実際の授業の流れとしては、ALT の話す英語または ALT と JT の会話を聞かせての導入→ペアワーク→発表という流れで、なるべく多くの生徒たちに発話・発表する機会を与えることを心掛けている。

更に、ALT とのティームティーチング授業では、校外学習、夏休みの出来事、体育祭、文化祭、水田学習（水田の生き物・田植え・稲刈り・脱穀）など、その時々为学校行事や生徒達が実際に体験した出来事を取り上げて英語で表現することに取り組んでいる。例えば、9月に夏休みの出来事を「～した」と語らせる際に動詞の過去形（規則動詞・不規則動詞）の導入を実施した。もちろん、過去形の表現の定着には時間がかかるが、生徒たちの英語習得にとって自らの体験を言語化することは有用であると考えている。

2.1.3 その他、授業外での取り組み

(1)パフォーマンステスト

本校では学期ごとのパフォーマンステストとしてスピーチなどを課するのが慣例となっている。しかしながら、通常は個人またはグループでの発表をクラス全体に向けて行うため、1人の持ち時間が最大でも1～2分程度に限られてしまう。そこで、73期中1では、イングリッシュ・ルーム講師を数名招聘し、ALT と JT 以外とも英語でのコミュニケーション実践を行えるようにした。10名程度の小グループでの発表を複数回繰り返して行わせることでより多くの発話量の確保を図りつつ、1学期末には英語での自己紹介、2学期末はクラスメート紹介に取り組みさせた。実際の発表ではイングリッシュ・ルーム講師陣と英語での会話を楽しむ生徒たちの姿が数多く見られた。



1 学期：グループでの英語自己紹介

(2) 副教材など

文法学習用の自習用教材として『5-STAGE 英文法完成 BOOK1』(数研出版)と『マーフィーのケンブリッジ英文法(初級編)第3版』(Cambridge University Press)を使用している。また、特に夏休みなどの長期休暇にはNHKラジオ講座『基礎英語1』(物足りない生徒には『基礎英語2』または『基礎英語3』など)の聴取を奨励している。

また、Writing指導として、English Journalと命名し、自由なトピックで英文をノートに書かせる指導を実施している。自己紹介や夏休みの英文日記など、題材をこちらから提供する場合もあれば、英語の歌や映画についての紹介などを日本語も交えて紹介させるなど、形式には幅を持たせている。

(3) 映画鑑賞

楽しみながら英語に接する機会として、期末考査後の特別時間割期間を中心に映画鑑賞の機会を設けている。中学1年生では1学期末に「ソウル・サーファー」、2学期に「スクール・オブ・ロック」を上映した。その際には映画に出てくる名台詞をいくつかまとめて紹介した。最近ではスマートフォンの普及なども進んでいるので、ネット動画なども含めて映画・海外ドラマなどに親しむことで、生徒たちは有益な英語インプットを得ることができると思う。

(4) 多読

図書スペースの約200冊の多読用英語書籍を活用した多読指導を12月より開始し、冬休みにはオンライン多読プログラムのトライアルを実施した。今後は蔵書数を徐々に増やしていくと共に、デジタル書籍の活用

などを含めて、英語多読を奨励していきたい。



図書スペースにて：英語多読の様子

2.1.4 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくか、すなわち英語学習全体のデザインの開発が今後の課題である。

2.1.5 中学1年生(73期) LL 担当：山田 忠弘

授業時間の半分でテキスト *Listen First* (2学期は *Basic Tactics for Listening*) の1ユニットを進め、残りの半分は自作プリントと小テストを行っている。

プリントでは、テキストの該当回の内容に合わせて *SIDE by SIDE (Extra)* から抜粋して、簡単な応答練習を行い、小テストはテキスト *Teacher's Book* から適切な問題を選んで毎時間行い、期末の評価に加えている。

音声データやスクリプトは復習できるよう、コンピュータースペースPC内で授業終了後に公開している。

<使用テキスト>

Listen First (Oxford University Press)

Basic Tactics for Listening (Oxford University Press)
教材

SIDE by SIDE (Extra) Book 1 (Pearson Longman)

SIDE by SIDE (Extra) Activity Workbook 1
(Pearson Longman)

2.2 中学2年生(72期) 担当：多尾奈央子

2.2.1 はじめに(基礎期の2年目)

昨年度より同学年を担当している。中学時の指導は3巡目となり、さらなる授業改善に努めるところであるが、入学当初にとったアンケートから、小学校での

外国語活動の経験から外国人教師との授業での会話やペア活動、さらには発表活動に抵抗感がなく、積極的に自己を外国語で表現する態度は養われていると感じるのは実感としても変わらない。その反面、その場の状況やジェスチャーなど文字を介さずにある程度の活動内容、発話内容が感覚的に理解できることから指示を聞き流したり、聞こえた単語からかいつまんで自分なりに解釈したり、と良くない「癖」が身につけてしまっていることも改めて強く実感する。「何となく理解」できれば、あるいは「何となく伝えること」ができればよいという学習ではなく、外国語（英語）を教科科目として「学習する」という心構えと姿勢を身につけさせること、いつ何時発話する場面に遭遇してもそれ相応に対応できる（発話・発表できる）ことを重要な指導項目とし、中2時に習得すべき学習項目を着実に運用できるような指導計画の立案に努めている。

1年間の授業を始めるにあたって、生徒には中2での到達目標として、以下の4点を示した。

●「話すこと/Speaking」について

- ①学習した型や語句を使って会話することができる。
- ②テーマに従い、簡単なプレゼンができる。
- ③聞き手を意識したプレゼン準備ができる。

●「書くこと/Writing」について

- ①学習した型や語句を使って正しく書くことができる。
- ②伝えたい内容に合う型や語句を選択使用できる。

●「聞くこと/Listening」について

- ①必要な情報を聞き取ることができる。
- ②身近な題材についての発言やスピーチ、ニュースを聞いて大まかな情報を聞き取ることができる。

●「読むこと/Reading」について

- ①文章の長さに関わらず要点や概要を掴むことができる。

2.2.2 授業の概要

2.2.2.1 授業の構成

英語の授業は週4時間あり、そのうち2時間を教科書で扱われる事項中心の授業（＝英語の基本的な構造や論理、および最終的には内容を産出するのに必要な語彙を学ぶ時間）、1時間をLLでの授業（＝聴解力を養う時間）、1時間を外国人教師とのTT授業（＝他の3時間で学んだことを実際に運用しながら、英語でコミュニケーションする力を育成する時間）と位置付け、指導を行っている。

いずれの授業でも、生徒にとって身近な場面や文の

型で繰り返したくさんの発話練習をすることで、コミュニケーションに必要な不可欠な「語彙」と「型（語順）」を身につけられるように教材作成に留意している。特に、発話内容が自身に基づくこと、自己を語ること、他者について知ること、知ったことを伝えることなど現実の教室で交わされるような場面を想定した内容が発話されるような教材作成・授業展開に留意した。

2.2.2.2 教材

・2時間の授業

三省堂 *New Crown English Series 2*

数研出版『5-STAGE 英文法完成 BOOK 2』

自主教材（プリント）

・TT 授業

正進社『Talk and Talk 2』

Heyer, S. (2005) *All New Very Easy True Stories*. NY: Pearson Japan

Heyer, S. (1998) *Very Easy True Stories*.

NY: Pearson Japan

Pearson Education (Longman) : *Side by Side 3*

自主教材（プリント）

その他、NHK 語学番組の『基礎英語2』聴取の継続を推奨しているが、生徒には自身のレベルや好みに応じて基礎英語3やその他リスニング教材を聴取するよう指導している。

長期休業中は課題として reader 書籍を与えるが、夏の課題には Edgar Allan Poe の “Seven Stories of Mystery and Horror” (Macmillan Readers) を、冬の課題には Sir Doyle, Arthur Conan の Sherlock Holmes “The Blue Diamond” を課した。課題に対する評価は、内容に関する小テストと音読テストを行っている。

日々の授業では、実際に検定教科書を開くことはせず、教科書題材や内容を踏まえた自作のプリントを作成し、使用している。というのも、教科書を開いても、架空の場面での出来事が進み、自分たちとの関わりを持ちづらい材料となっている場合が多いので、現実でどのように表現を使用するのか、学んだものを運用までつなげにくいからである。よって、教科書の文法や語彙は踏襲しながらも、目の前の生徒たちの実際の学校生活に即した場面や英語を使うよう努めている。

2.2.2.3 教科書で扱われる題材中心の授業と TT

教科として持つ共通認識の「文法等の先取り学習はしない」を踏まえて、教科書で扱われている文法項目

に沿った教材を毎回自作プリントにしたためて授業資料兼ノートとして使用している。教科書に掲載の文法事項や英文は基礎基本なので、必ず発展的なものを教科書以外のテキストや新聞、ニュースなどの現実世界のものも含めて様々な英文に触れられるように努めている。

教科書ベースの授業では以下が授業構成の基本型。

- 1) **small talk** でウォーミングアップ
→あえて、本時で扱う言語項目を反復使用する。
- 2) その日に取り上げる文法事項を使った活動
→動機づけとなるよう、生徒の日常に即した発話活動となるような内容に努める。
- 3) 教科書本文（一部改作）の確認
→基礎基本の型の提示
- 4) その日の学習事項を基に「書く」活動

TT 授業では、該当する文章の型の状況に遭遇した場合に発話・応答できるよう既習の文法項目を反復練習し、応用して自分自身のことについて述べるスキット作りと発表活動を行っている。人前で発表することに慣れ、聴衆に伝わるような発表能力を積み上げるために、毎回より多くの生徒が発表できる場を設け、評価の対象としている。発表時には生徒が互いに良い刺激となるようなフィードバックを述べさせることで、プレゼンの成否は話し手だけでなく、聞き手の姿勢も大事であることを理解させるべく努めている。発表の際の指導ポイントは、**Speak slowly, loudly and clearly.** および **Eye Contact** である。その他、**posture, gesture** の効果的な使い方、またはその逆も実践の中で指導している。

2.2.3 評価

評価材料の主なものとは以下の通りである。

- ①期末考査
- ②小テストや課題テスト
- ③課題（復習のための問題集と自作プリントなど）
- ④TT での発表活動

評価ポイントが多岐に渡り、生徒が各自自分のできている点ともっと力を入れたほうがよい点について把握しづらいが、特に個別評価用として個人カードを作成している。常時、授業時はいかなる学習活動でも机間指導により、都度個別に評価する方法の工夫に継続して努めているが、個人カードにより個別の学習内容や発表内容についての事後確認も記録として可能となっている。生徒の学習状況を把握し、学習行動を改善

させるにはよい方法であると思う。毎回個人カードで全員に対して評価できるわけではないが、これを用いることで、発話や発表の指名に際しても、公平に実施できること可能であり、継続しようすることで、生徒自身もいつ、何を評価されるのかを事前に察することができるようになり、毎回の授業や課題への取り組みが主体的になっていると思う。

今年度は特に、発話活動において生徒による相互評価を中心に織り込んだ。これは、あるグループ活動において、生徒たちが相互評価する様子を観察していると、教師の評価よりも生徒たち自身が評価し合う基準の方が厳しいことがわかったことによる。さらにこの評価内容をつぶさに見ていると、実に細かく、公平であった。また、指摘されたことをなんとか正そうと素直に応じる様子から、生徒たちの相互評価による学び合いは非常に効果的であると強く実感している。

授業実施者による評価のみならず、受け手である生徒たちによる評価も実に確かで、学習者同士の動機づけにも一役買っていることは間違いない。

2.2.4 中学2年生(72期) LL 担当：山田 忠弘

授業時間の半分で *Basic Tactics for Listening* (Oxford University Press) の1ユニット(4ページ)を進め、残りの半分は自作プリントと小テストを行い、リスニング問題(1000語レベルのリスニング教材より改題)や洋楽の歌詞穴埋め(聞き取り)を行っている。

音声データやスクリプトは復習できるよう、コンピュータースペースPC内で授業終了後に公開している。

<使用テキスト>

Basic Tactics for Listening (Oxford University Press) 教材

『究極の英語リスニング Vol.1』(2008) アルク。

2.3 中学3年生(71期) 担当：阪田卓洋

2.3.1 はじめに(実践期)

中高6年間を見据えた本校の教育方針では、中学3年生と高校1年生が実践期に当たる。過去2年で蓄えてきた英語を使うことに重点を置いた授業展開が求められていると言える。その点を意識して、以下の目標を掲げ、年度初めに生徒に示した。

Speaking: 事前に準備したスピーチで2, 3分話することができる。即興で1分程度話すことができる。

Reading: 簡単な英語で書かれた物語の概要をざっと

理解できる。

辞書を用いれば英字新聞の短い記事を読むことができる。

Listening: 自然なスピードの日常会話を一度聞いてその概要をつかむことができる。

自然なスピードの日常会話を複数回聞いて細かな情報をつかむことができる。

Writing: 卒業時に 300 語程度の英文で今までの学校生活の思い出を語るができる。

与えられたトピックに対して即興で 50 語程度の英作文を書くことができる。

具体的な数値目標を掲げることで、生徒たちに目指すべき方向を示した。ただし、その数値に拘泥するわけではなく、あくまでもそこに向けて努力することを通して、確かな英語力を醸成することを目指したまでである。

2.3.2 授業について

英語の週配当時間 4 時間は 3 つの要素から構成され、今年度は筆者がすべてを一人で担当している。内容は以下の通り。

教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ：2 時間
ALT とともに実際に英語を使ってみる：1 時間

LL 教室で聴解能力の訓練をする：1 時間

今年度は一人ですべてを担当できたため、リーディング教材を中心に扱いながらも、LL の授業で映像教材を視聴するなどして、一つの教材を深めるようにした。以下に何点かその取り組みを述べる。

2.3.2.1 Steve Jobs

1 学期間は Steve Jobs の生涯に光を当て、教材化した。Jobs はプレゼンテーションの名手として知られ、数々の伝説的な発表をしており、視聴覚教材としても利用しやすい。また、スタンフォード大学での Commencement Speech は今でも引用される名スピーチであり、こちらも教材として活用しやすい。そして何よりも、Steve Jobs の人生そのものが波乱に満ちており、教材として魅力的である。以上の理由から Steve Jobs の生涯を教材化することにした。英文は以下の本を参考にしている。

1. クリスティアン, トム (2012). 『英語で読むスティーブ・ジョブズ』(IBC パブリッシング)
2. Walter Isaacson (2015). *Steve Jobs*. Abacus
3. Karen Blumenthal (2012). *Steve Jobs: The*

Man Who Thought Different. Square Fish

4. Leander Kahney (2014). *Jony Ive: The Genius Behind Apple's Greatest Products*. Penguin

Jobs を扱った授業のおおまかな流れは以下の通り。

- ① Review (fill in the blanks)
- ② Oral Introduction (必要に応じて)
- ③ New Words
- ④ Silent Reading
- ⑤ Comprehension Check (T or F, Q & A)
- ⑥ Grammar Explanation
- ⑦ Read Aloud

生徒たちも Jobs の人生に興味を持ちながら英文を読んでくれたため、反応は概ね良かったと思われる。また、自分たちの身近にあるデジタル機器がどのように進化していったのかを彼の視点から追いかけるのは刺激的で面白かったようだ。題材としては力があつたと思われる。

授業の進め方はいたってシンプルにした。オーラル・イントロダクションも本文内容までは言及せず、あくまでも前時に読んだ文章と本時に読む文章のつながりを英語で簡単に説明するだけにした。自分の力で英語を読む時間をなるべく多く確保した。

LL の時間には『スティーブ・ジョブズ』(2013 年)の映画を中心に扱い、リーディングで扱った個所を映像的に補完しながら、iPod, iMac, MacBook Air などのプレゼン動画を見せた。映画やプレゼンで使われるセリフから生徒たちが好きそうなもの・文法的に覚えてほしいものを選び、ディクテーション・音読をした。以下に例文を載せる。

- Everything is a pressing issue.
- I already fired you!
- Why are you still here?
- I'll make the best game that you've ever seen. (以上すべて映画より)
- The thickest part of the MacBook Air is still thinner than the thinnest part of the TZ Series. (MacBook Air のプレゼンより。比較級の復習として)

映画を見ながら英語表現を学ぶことの利点は、意味だけではなく文脈も理解できる点である。Jobs が怒って部下を叱責するシーンなどは全員で叫びながら音読練習を行った。楽しい授業だった。

2.3.2.2 Romeo and Juliet

夏休みの課題としてマクミランリーダーズの *Romeo and Juliet* (Level 4) を配布し、巻末問題の答えを提出するまでを課題とした。

ロミオとジュリエットは名前こそ有名であるが、実際に物語を通読したことのある生徒はほとんどいない。ましてや、主人公のロミオやジュリエットが中学3年生くらいの年齢であることは誰も知らない。その情報から親近感を持たせつつ、この悲劇を真正面から扱うことにした。

授業では各幕の中心となる物語を本から抜粋し、文法的に解説し、音読する時間を取った。ここでの進め方は 2.3.2.1 の Jobs の進め方に近い。その一方で、原文のセリフと邦訳・解説をまとめたプリントを作成、配布し、それをもとに原文に触れる時間を設けた。筆者としては、せつかく内容を理解したのであれば、シェイクスピアの英語も併せて頭の中に入れてほしい。弱強5歩格を基本とするセリフのリズムは、声に出して読めば読むほど頭に染み込んでいき、その結果「英語らしいリズム」が体得されるものと思われる。

LL の時間には『ロミオとジュリエット』(1968年)と『ロミオ+ジュリエット』(1998年)を並行して視聴した。原作に忠実な1968版でストーリーやセリフを確認してから、現代化された1998版を見て、その違いに注目する。その激変ぶりに生徒たちは大笑いしながらこの作品を見ていた。両者の違いに関しては Weinland, M. (2010) を参考にして適宜解説を行った。

学期末には原文の英語を臨場感たっぷりに暗唱してもらうために、プロローグ、出会いのシーン、バルコニーのシーンから好きな場面を選んで演じる(プロローグは暗唱)、というパフォーマンステストを実施した。2時間の自由時間を与え、班ごとに撮影をして動画ファイルを Google Classroom で提出、という手法を取った。教室内のスキット発表ではなく、動画撮影の方法を取ることのメリットは何点かあると考える。

- ① 自分たちの作品を動画で撮影し、提出するまでに何回か見返すため、その過程で映画版の音声と比較し、自分たちの英語の発音や表現を見直す機会が生まれる。効果的な反復練習が自然と行われる。(映画版の音声を Google Classroom で配布している。)
- ② 自分たちで好きな場所をロケハンできる、ということ自体が大きなモチベーションになる。この自由度が高いほど生徒たちは楽しんで活動を行う。

- ③ 生徒たちは授業時間外でも活動できる。納得いく作品ができるまで放課後に残ってビデオ撮影している班もある。
- ④ 提出するのは動画データであるため、例えば学外にいる ALT と動画を共有してすぐに評価してもらうこともできる。(今回は ALT が来校できたため実施していない。)
- ⑤ 鑑賞会ができる。各クラスで行う鑑賞会、クラス優秀作品を集めてそれらを学年全体で鑑賞する学年鑑賞会、あるいは保護者会で優秀作品を紹介する保護者鑑賞会など多方面に利用できる。これがとても盛り上がる。

撮影の時間は校内の各所からシェイクスピアのセリフが聞こえてくる奇妙な時間だが、本校のおおらかな校風のおかげで今のところ問題なく実施できている。やはりロケハンにこだわるグループほど原文も完璧に覚えており、大変魅力的な作品に仕上がってくる。

動画提出後1時間を取りクラス全員で鑑賞会を行い、名演技をした生徒を投票で決め、Best Romeo 賞と Best Juliet 賞を贈った。大変盛り上がった。



トイレの窓から身を乗り出すジュリエット



高低差をうまく利用する2人



体育館の1, 2階の出窓を利用する2人



変装して出会いのシーンを演じる2人

2.3.2.3 ディスカッション

TT の時間では即興で話す力を養うためにディスカッションを取り入れた。身近で話しやすい話題に関して10分間グループで話し合う、というものである。授業の流れは以下の通り。

1. 教員によるトピックの導入と small talk
2. トピック (と選択肢) の提示
3. 自分の意見を考える時間 (2分程度)
4. グループディスカッション (10分)
5. 意見共有 (5分程度)
6. ライティング (5分程度)

以下にトピックの例を挙げる。

- ① 彼女と最初のデートで行く場所は？
- ② 無人島に何を持っていく？
- ③ 英語塾に行くならどんな塾が良い？
- ④ 男子校と共学どちらが良い？

トピックに応じて選択肢を与えた。例えば①で言えば、スカイツリー、ディズニールランド、上野動物園、

ROUND 1 を与えた。それぞれに入場料や中身の説明などを英語で書いておけば、デートなんてしたことがなく、またするつもりがない生徒でも少しは会話に入ることができる。また、ここでの情報でディスカッションが盛り上がることも期待できる (スカイツリーの入場料は高すぎる等)。

ディスカッションを授業でやる際に懸念されることは、生徒が日本語で話してしまうことや、沈黙の時間がひたすら続くことである。それを防ぐために魅力的なトピックを用意することが肝要なわけだが、今回はさらにいくつかの仕掛けを用意した。

① Useful Expressions の得点化

ディスカッション開始時に Useful Expressions を表にまとめたシートを配り、それぞれのフレーズに点数を明記しておく。生徒はそのフレーズを使ったときにその点数がもらえるという仕組みを採用した (このアイデアは上山 (2018) より)。こうすると生徒はどのようなフレーズを使うべきか参考にすることができる。また、授業ごとに点数を変動すれば、点数が高い表現を生徒が勝手に使ってくれる。「今日は反論フレーズがボーナスポイントになっています」と言い、反論フレーズの点数をいつもの倍にしておけば「めっちゃ反論してやろう！」となり、ディスカッション中ずっと「I understand what you are saying, but ...」と言っている生徒も出てくる。もちろん実際のディスカッションではこのようなことはあり得ないが、英語で反論しようと思ったときにそれを導入するフレーズがスッと出てくる、というのは将来的に大きな武器になるはずである。そのためのトレーニングとしては有効でないか、と思っている (以下に表を載せる。点数は変動させていない)。

Function	Expressions & Scores	
1 開始	① Let me go first.	2点
	② What do you think about ~?	1点
2 意見 (副詞とともに)	③ I strongly believe that ~	2点
	④ In my honest opinion, ~	2点
	⑤ As far as I know, ~ (私の知る限りでは~)	2点
	⑥ (Please) Let me finish. ~	2点
3 賛成	⑦ I agree with you because ~	2点
	⑧ I like your idea. / You're right.	1点
4 反対	⑨ That may be true, but I think ...	2点
	⑩ I understand what you are saying, but ...	2点

5	質問	⑪ Why do you think so?	1点
		⑫ What do you mean by ~? (~とはどういう意味ですか)	1点
		⑬ Could you give me an example?	1点
6	つなぐ	⑭ Are there any other ideas?	1点
		⑮ Who else agrees with (name)?	1点
7	結論	⑯ In conclusion, ~ (きちんと意見をまとめている)	2点
8	具体例	⑰ For example, ~ / For instance, ~.	2点
		⑱ In my experience, ~ / Based on my experience, ~	2点
9	確認	⑲ In other words, you're saying that ~.	2点
		⑳ I think you said ~, right? / I'm not sure I understand. Did you say ~?	2点
10	他者の経験	㉑ I've never done that, but my friend ~.	2点
		㉒ I'm not sure, but someone told me ~	2点
11	仮定の話	㉓ If that happened, I would ~	2点

② 日本語使用は0点

これも上の発想と同じだが、ディスカッションを得点化したことで日本語の使用を禁じることもできる。「固有名詞以外の日本語使用が見られた場合は得点が0点になる」というルールを設定すれば、生徒たちは①のシートを見ながら英語を話しつつ、周りの日本語使用を自分たちで厳しく咎めてくれる。ある日の授業で、英語が得意な生徒がポロっと日本語を言っしまい、それを聞いた同じグループの英語が苦手な生徒が“**You speak Japanese! You are 0!**”と叫んだことがあった。“**You are 0.**”は良い英語とは言えないが、きちんと英語で文句を言っている点が評価できる。グループ全体が大爆笑だった。

③ 最後はライティングで終える

間接的な動機付けになるが、最後にライティング課題を設定しておくことでディスカッションも盛り上がり、またライティングへの集中力も断然高くなる。ディスカッションから(クラスディスカッションを挟み、)授業最後にライティング用のシートを配布する。すると何も指示をしなくとももらった生徒から勝手に書き始め、先ほどまで雑然としていたクラスが波を打ったように静かになる。筆者もこの変わりようには大変驚いた。やはり話すことで頭の中にあることを整理することができ、また他者の発言から学ぶ視点や表現があるのだろう。speaking から writing の流れは大事であると再確認した。

上述した仕掛けを用意してディスカッションを導入したところ、日本語が使われることは全くなかった。生徒も毎回楽しそうに英語で話してくれたため雰囲気良く授業を行うことが出来た。

高校生では本格的なディベートなどが始まるが、そこに向けて正しい英語のフレーズを多量に頭の中に入れることが肝要だと思われる。①のようなシートを利用しながら、表現力増強の方法を模索したい。

2.3.2.4 帯活動

2年生に引き続き、授業の始めに帯活動を実施している。以下に述べる。

① 洋楽

任意課題として、洋楽が好きな生徒にお気に入りの一曲の歌詞カードを製作、提出してもらい、それを週に一曲ずつ紹介してクラス全員で歌う時間を設けている。自分の友人が紹介する曲なら全員親近感も湧く。また、一つの曲でサビが複数回出てくるため、一週間4回の授業で聞かせれば15回近くサビを聞く(歌う)機会が生まれる。週の後半には確実にサビが歌えるようになっているのである。これに気づく前は時間ももったいないと思い後半のサビを省略することもあったが、それこそもったいないことをしてしまった。一曲全部を扱い、サビを繰り返し聞かせ、自然と歌えるようになるのを待っていれば、生徒たちは確実に上手くなる。

② 即興スピーチ活動

中学3年間の英単語を定着させるために以下のようなスピーキング活動をした(2学期)。

1. 中学英語教科書3社以上が扱っている単語1000語をピックアップし、1000枚の単語カードにして封筒に入れておく。(教科書で学ぶ単語データは開隆堂HP http://www.kairyudo.co.jp/contents/02_chu/eigo/h28/index.htm よりエクセルファイルがダウンロードできる。)
2. 指名された生徒がそのカードから7枚引く。
3. その生徒は次の授業までにその7語を使ったストーリーを用意しておく。
4. 当日、その生徒は自分が引いた単語を黒板に書き、その後30秒~1分程度でストーリーを披露する。

5. 話を聞いた後、ペアで同じ単語を使って即興でストーリーを創作して披露し合う。
6. 何単語話せたかを所定の用紙に記録を記入する。
7. クラス全体でシェアしたい話があれば、シェアする。
8. 2, 3に戻る。

凝ったストーリーから、その場しのぎの適当なストーリーなどいろいろあったが、即興で英語を話し続けることと単語の意味をしっかりと理解して使うことが目的であるため、楽しく活動できていれば良しとした。時折「その単語の意味なんだっけ？」や「この動詞の過去形なんだっけ？」という発言もあり、良い復習活動になったと思う。

③ スピーチ暗唱

1年生の3学期より続けているスピーチ暗唱である。中学3年間で以下のスピーチを扱った。

- | | |
|----|---------------------------------------|
| 中1 | 3学期：Trump, Inaugural Address |
| 中2 | 1学期：Malala, Speech at UN |
| | 2学期：DiCaprio, Speech at Academy Award |
| | 3学期：Obama, Speech in Prague |
| 中3 | 1学期：Steve Jobs, Commencement Address |
| | 2学期：M.L. King Jr., I Have a Dream |
| | 3学期：MacArthur, Farewell Speech |

長期休みの課題でディクテーション、音読練習までやってもらい、休み明け最初の授業で音読練習を全員でやる。その後の授業からはランダムに2人ずつ当てて暗唱発表してもらう。King 牧師のスピーチは以下の箇所を暗唱課題とした。(括弧内の単語はディクテーションの対象)

I have a dream that one day this (1: nation) will rise up and live out the true meaning of its creed: "We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal."

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the (2: sons) of former slaves and the (2) of former slave owners (3: will) (be) (able) (to) sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a state sweltering with the heat of

injustice, sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis of (4: freedom) and (5: justice) .

I have a dream that my four little children will one day live in a (1) where they will not be judged by the (5: color) of their skin but by the content of their (6: character) .

I have a dream today!

暗唱発表に入る前には必ず音声と共に発音練習を毎時間行う。後半になれば生徒は飽きてくるが、何も考えなくても口から英語が出てくるほどに徹底的に頭に叩き込む。2.3.2.2での実践とも被るが、表現や語彙を暗記するだけではなく、そのスピーチの背景を意識したうえで、英語のリズムまで模倣することに筆者はこだわりたい。そのためには繰り返し聞いて模倣することが肝要である。暗唱を通して生徒たちの語感を鍛えたい。

上述した①～③の帯活動を毎時間繰り返した。

2.3.3 今後の課題

高校生でもいろいろな角度から英語の魅力を探求してもらいたいと思う。

<参考文献>

Weinland, M. (2010) "Power and Presentation: Comparing Juliet in Baz Luhrmann's William Shakespeare's *Romeo + Juliet* and William Shakespeare's *Romeo and Juliet*," *Articulate: Vol. 15, Article 6* (<http://digitalcommons.denison.edu/articulate/vol15/iss1/6>)

上山晋平 (2018) 『中学・高校英語スピーキング指導』. 学陽書房

2.4 高校1年生 (70期)

コミュニケーション英語 I 担当：高橋深美

2.4.1 はじめに

本校で使用している教科書は UNICORN English Communication 1 (文英堂) である。

この教科書は10課からなり、それぞれの課が、4つのセクション、文法解説、Exercises, Activities から

成る。授業では1課より学習したが、ほかに副読本を使用したり、教科書の内容に関連した独自教材を作成し使用したりしている。文法は中学の既習事項を復習しつつ、高1で基礎固めを完成するように心がけている。また、語彙、文法の補強として、付属のワークブックを持たせ、各自で取り組むこととしている。

なお、筆者はこの教科書を使用するのは2013年度に続き2回目である。2017年度より改訂版が出ているが、教科書の題材の中には2013年度にはタイムリーなものであっても、今扱うには色褪せてしまっているものがある。また以前の版には各課にあったSupplementary Readingが全てなくなってしまったのが残念である。

2.4.2 授業での取り組み

1学期は次の4課を学習した。

1. I Am a Photojournalist
2. Holmes and Watson
3. Alma Rose
4. Forests for the Future

1課については、教科書を終えた後、キルギスの誘拐結婚を題材にして、映像を見ながら学習する発展教材を作成した。2課についてはThe Speckled Band (Jeremy Brett 主演)を一部文字起こしをして教材とし、全編を映像で見た。3課と4課についてはあまり深入りせず、残余の時間で、Bob GreeneのRailroad Manおよび、初めてブラックホールの撮影に成功したニュースを取り上げ、こちらは映像を見ながら学習した。

夏休みにはThe Hound of the Baskervilles (by Sir Arthur Conan Doyle) (Oxford Bookworms stage 4)を副読本として課し、2学期明けに小テストを実施した。

2学期は次の4課を学習した。

5. Methane Hydrate
6. El Sistema: The Miracle of Music
7. Why Are You Sleepy?
8. Haruki Murakami Abroad

2学期の授業の概要については以下の通りである。主として発展教材を中心に述べる。

5課はメタンハイドレートの結晶構造や採掘に関する問題点等を取り上げてみた。6課は南米のベネズエラで国家規模の音楽教育プログラムに成長した「エル・システマ」の話である。創始者のJose Antonio Abreuが2018年に他界し、またベネズエラ自体も混

沌とした状態であるが、Jose Antonio Abreu および関係者の語りと団員の家庭、音楽シーンから成るDVDがあり、中で語られている、創始者のJose Antonio Abreuの哲学が大変すばらしく、また、さまざまな音楽シーンが生徒のイメージを広げる上で役に立ちそうだったので、編集して教材化した。ベネズエラが舞台であるから、話している言葉はスペイン語だが、その英語字幕を教材にした。

7課については教育実習生が担当したが、insomniaに関するパッセージおよびClaudia AguirreのTEDスピーチ‘What would happen if we didn’t sleep’を使用した。

8課はカナダの大学の先生が語る村上春樹賛歌で、作品を読んだことがないとピンとこない課ではある。筆者は村上春樹が好きで、教科書に書名が挙がっている小説は全て読んだことがあったので、生徒が読みたいくなるように、かつ話の内容をあまり明らかにせずに、それぞれの作品の魅力を伝えようと試みた。このほか、2009年にイスラエルで文学賞を受賞した際に村上春樹が行ったスピーチを並行して使用した。

2.4.3 プロダクションについて

1学期はRailroad Manについて、「筆者は主人公のCharles Fordを通してどのような人生を描きたかったのか」という英作文を課した。

2学期は1分程度のスピーチを行い、「授業で学習したことと関係のあること」であれば基本的にトピックは自由として行った。この授業では実質的に初めてスピーチを行ったが、やはり「間違えないようにやろう、準備してきた原稿通りに話そう」という意識が濃厚であり、今後改善すべき点が多く見られた。

2.4.4 今後の課題

4技能の伸長が英語科の科目の目指すところであるが、これまで映像授業を含め、読む活動を多く取り入れてきた。今後は読む活動を他の技能の伸長と関連づけていきたいと考えている。

<参考文献・資料>

キルギスの誘拐結婚 林典子著 National Geographic
シャーロック・ホームズ DVD BOOK 宝島社
The Hound of the Baskervilles (Oxford Bookworms state 4)
EL SISTEMA DVD EUROARTS

2.5 高校1年生(70期)英語表現I

担当：山田 忠弘

2.5.1 はじめに

英語表現I(2単位)は、LL授業とTT授業(各週1)から成り、前者がListening、後者がSpeakingの内容となっている。中学校と同じく、LLはLL教室で、TTはALTとのTeam Teachingで行われる。

2.5.2 LL教室での授業

授業時間の半分でDeveloping / Expanding Tactics for Listening (Oxford University Press)のユニット1課(4ページ)を進め、残りの半分は自作プリントを用いて、別のリスニング問題(CNN ニュースリスニング(朝日出版社)、English Journal(アルク)など)、洋楽の歌詞穴埋め(聞き取り)などを行っている。音声データやスクリプトは復習できるよう、コンピュータースペースのPC内で授業終了後に公開している。

評点(50点)は、毎授業で簡単な小テストを行い、期末試験(初見問題含む)と合わせて算出した。

2.5.3 TT授業

1学期は「自分の意見を英語で言う」ことを目標に、Solutions(CENGAGE Learning)のトピック(Bicycle Licensing など)について、3~4人のグループで意見を発表させ、ALTとそれぞれコメントを加えた。

学期末Speech Testとして、テキストを音読し、自分の意見及びその理由を述べ、ALTの質問に答える、の3つを1人ずつ行い、授業でのSpeech(校外学習の思い出)と合わせて、評価を行った。Speech Testのテーマは、既習の4つBicycle Licensing / Japlish / Amakudari / Kids and Smart Phonesから選ばせた。

2学期は、Speech(夏休みの思い出)の後に、Parliamentary Debateを行った。Parliamentary Debateとは、与えられた論題(motion)に対して、肯定側(Government)と否定側(Opposition)が3対3で行う即興型ディベートの方式である。(詳しくは駒場論集第56集、須田智之教諭の個人研究を参照)

2学期は以下の論題(motion)を扱った。教員が自分で考えたものもいくつかある。

- Tsukukoma should be a co-educational school.
- We should legalize euthanasia in Japan.
- High school students should not read comic books.
- We should legalize casinos.
- Anonymous writing on the Internet should be banned.

• It is better to spend the Christmas Day with your girlfriend than with your family.

班分けはこちらで毎回変えて指定し、教員(山田とALT)は、人数が足りない班に、ディベーターやジャッジとして参加した。

それぞれの役割や、タイムスケジュールなどは全て決まっており、ワークシートも役割ごとに用意されている。準備時間(15分)に話し合いで自分達の説得力あるポイントを考え、なおかつ相手のポイントも聞き取って、反論する力が求められる。また、自分が話す予定の英語を予め全て書いておくことは不可能であり、良い意味で「英語の適当さ」と「頭の回転の速さ(瞬発力)」が求められる。英語の流暢さはもちろん重要だが、議論の説得力の方がより求められることで、普通の生徒が帰国生徒と互角に渡り合う場面も見られた。

評価は最終2回をTest Roundとし、勝敗によって若干の点差をつけたが、あまり大きくならないように配慮した。3学期も引き続きこのDebateを行う予定だが、評価(評点)の問題については、取り組み具合と結果(勝敗)のバランスを、適切な形で表せるように引き続き検討していきたい。

<使用テキスト>

Expanding Tactics for Listening (Oxford University Press)

教材

CNN ニュースリスニング(朝日出版社)年2回発行
English Journal(アルク)月刊
Solutions(2009)(CENGAGE Learning)

2.6 高校2年生(69期)コミュニケーション英語II

本校のコミュニケーション英語IIは4単位であるが、3単位を教科書などを中心とした学習に当て、八宮が担当、1単位をティーム・ティーチングとして須田智之が担当している

2.6.1 (3単位分) 担当：八宮孝夫

2.6.1.1 はじめに：年間の目標など

筆者が年間の目標と考えているのは以下の通りである：

- 1) その課で学んだ教材の概要やそれについての感想を英語で表現できる。
- 2) 英語学習はことばの学習である、という意識づけをさせる。

英語の運用力をつけるのはもちろん重要であるが、語源とかそのことばの持つ文化的背景など、ことばへの関心を高めることも同様に大切である。

以上は、昨年の論集でも述べたことで、今年度も基本的にこれは変わらない。69期も、1年間の授業を経て筆者の授業スタイルに慣れてきたので、上の2つの目標に加えて、英語の持つリズム、言葉遊びなどの視点を重視して、授業実践を行った。

2.6.1.2 1学期の教材：詩の導入

高2で採択している教科書は *Unicorn English Communication 2* (以下、*UEC2*) であるが、これにこだわらず、有益と思われる教材を適宜使用する(本校は同一学年を1人の教師が担当するので、教材選択は比較的緩やかである)。1学期に扱った教材は以下の3つである：

1 Reading a Poem

2 Winnie the Pooh

3 What is Uniquely Human?

教材的には、65期の高2で扱ったものと同じである(詳しくは『駒場論集55集』を参照)。したがって、そこで書いたのとは違う視点「詩の導入」で、ここではまとめてみる。

① Reading a Poem

この教材は現行の *UEC2* には掲載されておらず、*UEC2* (2015年版)にあったものである。詩の扱いは難しいと考えられているためか、その時もL. 12として、ほぼ付録と同様の扱いであり、現行版では割愛されてしまった。

詩の扱いの難しさは、確かにある：リズムや韻を意識するため、散文とは語順が異なり、意味が取りにくくなる；詩でしか使用しない語、言い回しがある；詩の書かれた背景が分らないと詩人の意図もわかりにくい場合がある、など。

しかし、この一見扱いにくい点が、詩を扱いやすくする要素でもある：リズムや韻という形から入っていく；英語には *Nursery Rhymes* を始めとして、子供にも理解しやすい詩がたくさんある；物語詩のように、内容的に散文に近いものもある。

この *Reading a Poem* では20世紀で一番優れた英国詩人の1人であるフィリップ・ラーキン(Philip Larkin)の詩を、その「作品」とともに、どう読み解いていくかという「解説」が散文の形で後に続いている。詩の技法や、詩の書かれた背景なども併せて学ぶ

ことができるという点で稀有な教材と言える。

初めからラーキンの詩を扱ったのではなく、比較的親しみやすい、ミルン(A.A. Milne)の以下の詩から導入した(Milne 著 *When We Were Very Young* に所収)：

Daffowndilly

She wore her yellow sun-bonnet,

She wore her greenest gown;

She turned to the south wind

And curtsied up and down.

She turned to the sunlight

And shook her yellow head,

And whispered to her neighbor:

“Winter is dead.”

まず、題名は伏せておき、Sheが何のことか、季節はいつごろか、などに注目させて読ませる。“yellow sun-bonnet,” “greenest gown”などから、花であること、“Winter is dead.”から、春が近い季節であることはすぐ理解できる。「タンポポ」などの答えも出るが、じきにスイセンの写真を見せて、題名はスイセンの英語名である *daffodil* の方言的な言い回しである *Daffowndilly* であると紹介する。

次に、形に注目させ、同じ音が出てくる部分、1行中の母音の数、リズム(強弱)など考えさせる。“gown-down” “head-dead” の関係を指摘したら、脚韻(rhyme)と呼ぶこと、1行中に母音が8つ出てきて、それらが弱強のリズムを持っていることに気づいたら、それぞれの「弱強」のペアを「歩格」と呼び4つあった場合は「4歩格」(tetrameter)、弱強パターンを *iambus* と呼ぶので、全体としては「弱強4歩格」(iambic tetrameter)であり、英詩の典型的なパタンの1つと補足する。

このように、リズムの名称など教えすぎるのは適切かどうか、には賛否もあると思われるが、生徒は、この *iambic tetrameter* という謎の呪文のような名称を意外と面白がっておぼえるものである。

その他、“shook her yellow head”など花を人にたとえている「擬人法」、*“Spring has come”*でなく“*Winter is dead*”とささやいたことの効果、面白さ、などに注目させ、英詩が決して敷居の高いものではないことを実感させることが大切である。

以上のような下準備ができた後に、教材であるラーキンの *At Grass* に入った。第一連だけ引用する：

The eye can hardly pick them out

From the cold shade they shelter in,

Till wind distresses tail and mane;

Then one crops grass, and moves about
– The other seeming to look on –
And stands anonymous again

牧場の木陰で休んでいる馬の描写であるが、全編を通して“horse”という単語は登場せず、この第一連も1度読んだだけでは、どういう状況か掴みにくいのである。それでも、ミルンの詩で脚韻や弱強のリズムについて学習済みなので、少なくとも形からアプローチすることは可能である。

詳細は省くが、これをあとに続く「解説」の部分を読みながら、読み解いていくのである。したがって、筆者の場合は、第一連→解説の本文、第二連→解説の本文、というように交互に進めた。詩の全体像を出してから、推測させながら進めるやり方もあると思われるが、一連一連、状況が明確になったうえで、次の連の意味を推測させた方がやりやすいと感じ、筆者は小出しで紹介してゆくやり方を採用した。

② Winnie-the-Pooh

次に扱ったのは、ディズニーで広く知られた「プーさん」である。しかし、本来はアニメでなくミルンの書いた子供向けのお話であることを知っている生徒は少ない。

「子供向け」と書いたが、その中に登場する言葉遊びは見事なものが多く、高校生や大人も侮れない面白さである。また、プーさん自身が、所どころで自作の詩を披露するのである。話の内容はたわいもないものもあるが、やはり、一つ一つのお話が進むにつれて、分量も内容の複雑さも増しており、読者が無理なく読み進められるような工夫がなされている（作中の言葉遊びについては『駒場論集第49集』で述べたので、ここでは割愛する）。

やり方としては、まず5月の連休前に、連休中の読み物として *Winnie-the-Pooh* の第1章、第3章を reading points を設けて課題とした。第1章は A.A. Milne (2002) に注釈付きで載っているので、それを採用し、第3章は自力で読むような形式にした。授業では、*Winnie-the-Pooh* の朗読 CD (Blackstone 社版) をかけながら、課題の設問に答えさせる形で進めた。第1章が終わったところで、LL 教室で、ディズニー版の DVD (『くまのプーさん』完全保存版 Walt Disney Classics) を鑑賞し、原作との違いを考えさせた。ディズニー版は原書の第1章、第2章を合体させて1つのエピソードになっているので、これを見せた時点で、第2章のプリントも配布する。ディズニー版

は、アメリカの典型的な動物であるホリネズミ (gopher) が登場し、原文の持つ言葉遊びの面白さより、アニメの持ち味であるスピード感と動きの面白さに重点が置かれている。そのあたりを比較させるのも面白い。

最終的には想像上の動物 Heffalump を探しに出かける第5章までを扱った (ミルンの言葉遊びは音声が基調になっており、この heffalump にしても、用いられている母音や子音は elephant とほぼ同じで、アクセントも全く同じであるから発音するとなんとなくゾウに近い巨大な動物を創造する、特に最後の lump は「かたまり」という意味の単語になっているので、ダメ押しで「巨大な塊」感を出している)。

③ What is Uniquely Human?

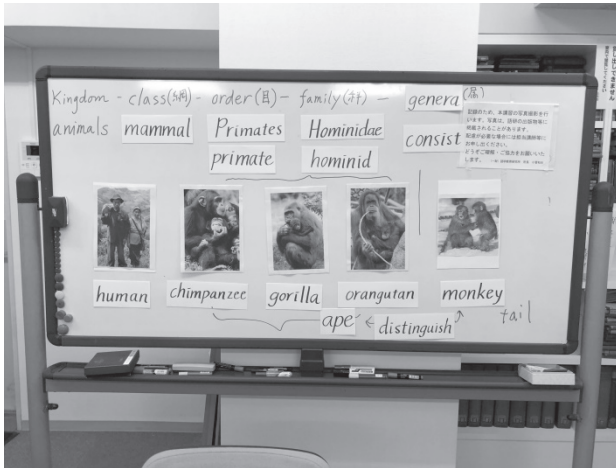
これは *UEC2* の L.6 である。以前の版にも入っており、65期でも扱った。京大高等研究院の現特別教授である松沢哲郎氏の手になる英文で、ほぼ同内容の動画が you-tube にある (例えば Tetsuro Matsuzawa at TEDx@Kyoto 2013)。この you-tube を利用しての実践については『駒場論集第55集』を参照のこと。

この教材は、前の2つが文学系だったのに対して理科系の内容であるから、語彙的に理科系に特徴的なものが多い。例えば、primates (霊長類) family hominidae (ヒト科), genus – genera (属), primates に至っては、ラテン語読みと英語読みが登場する。幸い、本校は理系に関心の高い生徒が多く、生物分類で用いられる「界・門・綱・目・科・属・種」に通じており、それに対応する英語名はこれまで別の意味で用いられてきた単語が多いので、この際全て教えてしまうことにした。Human, chimpanzee, gorilla, orangutan, monkeys の関係性と、それぞれがどの分類に属するかを、板書しながらまとめた(下に示すのは、別のところで板書を再現したもの)。Kingdom (界) – phylum (門) – class (綱) – order (目) – family (科) – genus (属) – species (種) というように、日本語だとかえって難しい「綱」が英語では class で表現できるのは新鮮な驚きを与えたようであった。また、この覚え方として“King Philip came over for good soup.”があることも紹介した。

以上のように、ラテン系の理科系の用語も、既存の知識を利用して導入することも可能な場合がある。

残念ながら、時間的な関係で1学期末はパフォーマンス・テストを課すことが出来ず、生徒がこれらの教材に関してどのような発表をするか、は記録すること

ができなかった。



2.6.1.3 2学期の教材

2学期に扱ったのは以下の3つの教材である：

- 4 Eat the “Ugly” Carrot, Save the World
- 5 Romeo and Juliet
- 6 What is Artificial Intelligence?

こちらは、65期とはすべて異なった教材である。それぞれ概要を記す。

④ Eat the “Ugly” Carrot, Save the World

教科書のL3で、教育実習生が担当したものであるが、授業の展開については筆者と相談しながら進めた。比較的初めの方の課なので、平易と思われがちだが、原文は *The Washington Post* に掲載された論文であり、部分的にやさしい語彙に書き換えられているが、論理の展開など少しひねっており、文意を取らせるのに注意が必要な課である。第1文は次のように始まる：

You can always tell that I’ve been eating from a bowl of tortilla chips because the only chips left are the perfect ones:

一見したところでは、because 以下の内容が、主文と因果関係を持っているように思われたい。読み手としては「なぜ？」と困惑し、続きを読みたくなる構造である。結局、著者は形の半端なものを好んで食べる習性があること、その習性は有機栽培農家で身につけたもの、と展開しテーマに入っていく。

また、Part4 では、Buy the “ugly” carrot. Tell our grocers and our farmers that we’d rather have a slightly bent cucumber than a hot, dry planet. と、タイトルを踏まえた主張が登場する。“ugly” と引用符がつけてある著者の意図は何か、a slightly bent cucumber と a hot, dry planet の関係も直接ではな

くて、その間の因果関係を読み取る必要がある(その過程が本文中に書いてあるわけである)。

また、キーワードとなる high aesthetic standards (高い審美的標準)も the food system caring about appearance (外見にこだわった食糧体系), insisting on perfect-looking produce (完璧な姿の作物を強要すること) など様々な言いかえをされており、これらが実質同じことを繰り返して主張しているという談話的な流れの理解も求められる。そういう点で、ただ直訳的な理解でなく、内的な意味・論理的つながり (coherence) を養うのに適した教材ということができる。

教育実習生に担当してもらったこともあり、1つのパートに2時間かけ、Read and look up も本文すべてで実施した(1時間で扱った場合、summary の英文を音読する程度で終わってしまうことが多い)。期末考査の結果を見ると、この課に関する設問は比較的正確解しており、やはり丁寧に扱った分定着率も高かったのではないかと、反省させられたものである。

⑤ Romeo and Juliet

これは、夏課題として出した『新シェイクスピア物語』(グリーン著・成美堂)の作品中の一篇である。英国の児童作家による物語としてリトル版とはいえ、読むに耐える英文である。そして、その注釈には有名なセリフなどが原文で載っているところも魅力で、筆者は高2の課題として、これまで4回ほど使用してきた。65期では *The Merchant of Venice* を扱ったが、今回は *Romeo and Juliet* を教材化した。実は65期では中3で扱ったものであるが、高2ではもう少し深いやり方を試みた。

既に夏課題として読み、設問に答える形で概要は理解していることを前提としながらも、まずは、DVDによるビデオ視聴をした(1968年版)。3回に分け、視聴後、理解チェックの設問をした。その後、劇の前口上である The Prologue を扱った。

Two households, both alike in dignity,
In fair Verona, where we lay our scene,
From ancient grudge break to new mutiny,
Where civil blood makes civil hands unclean,
From forth the fatal loins of these two foes
A pair of star-crossed lovers take their life;
Whose misadventur’d piteous overthrows
Doth with their death bury their parents’ strife.

これは、課題の本の解説に注釈付きで載っているも

のであり、本来は14行からなるのであるが、初めの8行だけでも、端的に劇の概要を述べている点で、読みながらもう1度、あらすじの復習になる。同時に1学期に既習の詩の技法の復習にもなる。例えば、

- ・ Two households とは、どことどこか？
- ・ civil blood makes civil hands unclean とは？
- ・ a pair of star-crossed lovers とは誰と誰？
- ・ with their death bury their parents' strife は、どのような経緯でそうなった？

つまり、最低限の流れは、これで確認できるのである。また、脚韻や、詩のリズムも確認し、14行詩はソネットと呼ばれる形式であることなど補足できる。

次に、二人の初めての出会いのシーン（実はここもソネット形式で書かれている）、バルコニーのシーン、と原文を扱う。さらに、マキューシオとティボルトの決闘シーン。シェイクスピアの作品は基本的に韻を踏まないブランク・バースで書かれているが、所どころ散文で書かれているところがあり、決闘シーンはそれに該当する。最後は二人がなくなるシーンを扱った。（これらの資料作成に使用した文献は「参考文献」に記す）

今回は教室にプロジェクターが設置されたおかげで、教室で本文を扱いながら、該当箇所を動画で映して確認したり、別のバージョンの同じシーンを確認することもできた。例えば、イギリスのグローブ座で公演された *Romeo and Juliet* が全編 you-tube に上がっており、居ながらにして本場の劇が鑑賞できるのである。

全授業終了後、1夏課題で読んだ時の印象と授業後の印象、2一番印象に残った場面、3verse の効果について感想を書かせた。一例をあげる：

1 When I read *Romeo and Juliet* before studying in the class, I was impressed by their strong love. But I saw the movie of *Romeo and Juliet* in the class, and after studying in the class I was impressed by their death.

2 The scene that Romeo and Juliet at the party. In the scene, Romeo and Juliet fall in love with each other, and a verse is used so the scene appeals to me most.

3 I think verses used in the original text are effective. They describe emotions of Romeo and Juliet well, and I can understand the emotions more deeply. (2-4 A)

別の作品との比較を書いた生徒もいた：

After reading *Romeo and Juliet* for the first time,

I felt this story was similar to *Titanic* (movie in 1997). The overall story – Jack dies and so do Romeo and Juliet – is of course similar, but the details have many things in common as well. For example, the scene Jack / Romeo met Rose / Juliet for the first time, he fell in love with her at the first sight, but their social statuses were completely different. Their love is unimaginable and their marriage almost impossible. People around them try to disrupt their love, but their relationship become only stronger. Another similarity is that a disaster happens and tears them apart. They try their best to survive, but unfortunately their plan fails and their love is never fulfilled. Although these are totally different fictions written in different times but liking this kind of story might be inherent traits of human beings. (3-2, K)

⑥ What is Artificial Intelligence?

*UEC2*のL.9に The Future of AI という課がある。ところが、既に制作終了している ASIMO が one of today's most remarkable examples と紹介されている一方で、machine learning も deep learning も登場しない。これでは仕方ないと思い、求めたのが *Artificial Intelligence* (Jerry Kaplan, OUP)であった。AI に疎い筆者にも何とか読み進められるレベルであったからだ。早速教材化しようとしたが、どのテーマも数ページあり、1日で扱える分量にするのは困難であった。ところが、著者のカプランが上記の図書に基づいてイタリアの大学で講演した6回シリーズが AI: what everyone needs to know Part 1-6 として you-tube にあることを発見した。そこで Part 1: What is Artificial Intelligence? Part 2: History of AI, Part 5: Effects on Jobs and Wealth で、おおよそ概要をカバーすると考え、この動画をテキストにすることに決めた。

前項であげた教室内のプロジェクターを再び活用することにした。通常のリスニングと違い、画面もあり文字情報も時々入るので、バーチャルな講義を聞き概要を理解することを目標に、必要最小限の新語を導入する以外は、リスニングポイントを示し、それを聞き取ることに集中させた。その後、全員で概要を確認し、2度目は文字を見せ、何箇所か理解の助けとなる箇所をブランクにし、特定の箇所に集中させる形で2度目のリスニングを行った。

3分程度のリスニングでも分量はA4版の3分の2程度の長さになるので、全文の音読はかなわなかった。その代わり、次の時間の最初に行う review としてのサマリーの穴埋め後は、その全文をクラスで音読するよう心掛けた。結局、Artificial Intelligence という名称の由来、the symbolic systems approach と machine learning approach という2つの考え方を中心に、最後は社会への影響を考えるという構成になった。

今回プロジェクターの動画を利用し、バーチャル講義の聞き取りを試みたわけだが、やはり画面の中で講義をするのを聞くのは、実際にその人物がその場において講義するのはやはり違うということだ。まず、教室内のプロジェクターは1メートル四方程度で圧倒的に小さい。音声はCDラジカセから増幅させて出していたので、やはり、その人物から出ているようには聞こえなかったであろう。復習やまとめとして見せるのは良いが、イントロダクションも含め、動画に頼るのはあまりよくないことに遅まきながら気づいた。やはり、多少拙い英語でも、イラストを用意したり黒板に視覚的に展開して説明したほうが良かったのだと反省した。もし、プロジェクターから移す動画で事足りるのであれば、実物の教師の存在意義がないであろう。

2.6.1.4 2学期のパフォーマンス・テスト

1 学期に実施できなかったため、今回は早くから実施することを生徒に予告した。指示は以下の通り：

1 推奨：*Romeo & Juliet* The Prologue 暗誦 (or それ以外の有名なセリフの場面)

2 AI について、うんちく (今回の補足になるようなこと) を英語で

3 夏課題の自由研究で聴衆の関心を引く自信のあるものを英語で紹介

以上の中から1つ選び、1分半程度で発表する。

実施は期末考査後の特別授業中の2時間である。1時間でクラスの前半半分、2時間目に後半半分の生徒発表である。発表時間が1分半程度なのは2時間で全員が終了するという想定からである。

発表は圧倒的に1の暗唱が多く、2のうんちくがクラスで1、2名、3の夏課題も同数であった。

1の暗唱の評価は、音量、発音・リズム、アイコンタクトの3点で評価し、聴衆側の生徒にも参考に評価させた(彼らの評価を全面的に取り入れるわけではないが、筆者が判断に迷ったときなど、生徒の評価は参考になるものである)。2、3では内容の面白さも勘案

した。

暗唱の効果を何らかの形で数値化して示すことはできないが、上でも一部あげたように、the prologue は相当に構文も複雑で、意味も構文もしっかり理解していなければ暗唱できるものではない。そして、言いながら、頭の中で構文をあれこれと操作することは、ある時期の外国語学習では必要なことと筆者は考える。

2.6.1.5 今後の予定

今後の授業予定は年間計画表に書いたとおりである。つまり、米国の南北戦争とリンカンのゲティスバーグ演説、また、アンブローズ・ピアス作の南北戦争を舞台にした短編 *The Coup de Grâce*、を扱う予定である。

いずれも以前に扱ったことのある教材であるが、情性に流されず、新たな資料を加えて、臨みたいと思う。

<参考文献>

1. 八宮孝夫 (2009) 『筑波大学附属駒場論集第49集』
2. 八宮孝夫 (2015) 『筑波大学附属駒場論集第55集』
3. Kaplan, Jerry (2016) *Artificial Intelligence: What Everyone Needs to Know* (OUP)
4. 村上淑郎 (1997) 『高校生のための原典 Shakespeare』(筑摩書房)
5. Milne, A.A. (1992) *When We Were Very Young* (reissue 版, Puffin Books)
6. Milne, A.A. (1926) *Winnie-the-Pooh* (Methuen)
7. 齋藤 勇 (1954) 『英詩概論』(研究社)
8. 斎藤兆史 (2010) 『聴く読むわかる! 英文学の名作名場面』(NHK 出版) (「ロミオとジュリエット」の項)
9. Shakespeare W., Roma Gill 編 (2008) *Romeo and Juliet* (Oxford School Shakespeare) (OUP)
10. 谷本誠剛, 笹田裕子 (2002) *A.A. Milne* (現代英米児童文学評伝叢書4) (KTC 中央出版)

DVD, CD など

1. *Romeo and Juliet* (1968) Paramount Home Entertainment
2. *Winnie-the-Pooh: A.A. Milne's Pooh Classics, Volume 1* (2003) (Blackstone Audiobooks)
3. *Winnie-the-Pooh: 『くまのプーさん』完全保存版* (2004) (ブエナビスタ・ホームエンタテインメント)

2.6.2 TTでの取り組み 担当：須田智之

2.6.2.1 はじめに

高校2年生(69期生)のコミュニケーション英語Ⅱ(4単位)中の1単位の時間を使って、ALTのMatthew Wiegand先生とのティームティーチング(以下TT)の授業を実施している。この1時間では、主にリスニング・スピーキング力の向上を図ることを念頭に置いて、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート等の活動を例年実施している。筆者は、2015年度以降、3年連続でこのTTのクラスで即興型英語ディベートを活動の中心に据えて授業を実施し、今回は1年ぶりの担当となる。

本校に赴任して最初に高2のTTを担当した2012年度には、英語ディベートの指導に関して全く経験がなかった為、準備型英語ディベートの全国大会を参観しに行ったり、帰国子女や社会人向けの英語クラスでの即興型ディベート等に参加したりするなど、様々な試行錯誤を重ねていたことを記憶している。転機となったのは、2015年の夏に、本校の秋元教諭に紹介して頂いた一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会(以下PDA)の講習会に参加したことであった。その後、自らも英語ディベート経験を重ねながら、部活動の指導と英語ディベートの普及活動にも取り組んでいる。

2.6.2.2 1学期の授業

1学期の授業では、例年、即興型英語ディベートに慣れ親しむことを目標としているが、筆者は高校2年生(69期生)の授業を担当するのは今年度が初めてであったので、まずは4月の授業開きから2回の授業を使って英語での自己紹介スピーチを実施してもらった。また、その原稿を提出させ、英文の典型的な誤用についてWiegand先生にまとめて頂いた。

その後、英語ディベートについての概要・ルール説明の後、簡単な論題での実践開始といった具合に徐々に英語ディベート実践を進めていったが、69期生は高1の時にすでにディベートを授業で体験しており、例年よりもスムーズに授業を進めることができた。

本校の授業で採用しているのは、大阪府立大学の中川智皓准教授(PDA代表)考案の50分授業で1ラウンド完結可能なフォーマットである。英語ディベートを行う際の役割やルール、試合の流れなどについては、中川先生の著書である『授業でできる即興型英語ディベート』を参考にされたい。1学期には生徒同士の対戦(ラウンド)を以下の手順で実施した。

まず、生徒は座席ごとのブロックで6人1班とし、その中で肯定側3人、否定側3人の2チームを作る。次に、論題(モーション)発表を行い、約15分~20分の準備時間を取ってそれぞれのチームで役割に応じたスピーチを考えさせる。最後は別室の会場にて対戦を実施させ、ジャッジによる勝敗の判定と振り返りを実施する、というのが毎回の実践の大まかな流れである。

本校は前出のPDAの学校会員になっており、毎月論題が単語シートともに送られてくるので重宝している。授業では更に練習会や大会で論題のアイデアを仕入れつつ、生徒の興味関心を引きそうな論題を選択している。また、対戦に際しては、1班6名に審判(ジャッジ)と司会(チェアパーソン)を担当させ、司会進行や勝敗の判定などの経験からも英語ディベートに対する理解を深められるように工夫をしている。

1学期に扱った論題は下記の3つであるが、最初のもは直前の高校生大会で実際に出題されたものである。少々刺激的ではあるが、各チームの立論を作る際のブレインストーミングの練習用に採用した。

- THW allow high school students to fire their teachers.
- We should abolish homework.
- We should make it mandatory for elderly citizens to return their driver's license.

英語ディベートからは離れるが、1学期の評価は学期最後に行うパフォーマンステストを中心とした形で例年実施している。内容としては、高2は5月に実施される関西地域研究(校外学習)で各自のテーマに合わせてフィールドワークを実施する為、訪問先で出会った誰か(例えば寺の住職やホテルの支配人等)になり、関西の魅力をアピールするという英語スピーチを実施させている。スピーチ原稿のモデルとして、京都市のウェブサイト中の市長の英文挨拶を、デリバリーに際してはGeorgia Techの入学式のスピーチを参考にさせて頂いている。

2.6.2.3 2学期の授業

2学期も引き続き、即興型英語ディベートを中心に授業を展開した。使用した論題は以下5つである。

- We should introduce grade skipping.
- THW abolish club activities for schools.
- Assuming feasibility, THW use scores of

private-sector English tests for university entrance qualifications.

- Celebrities who got accused of drug scandals shouldn't be allowed to back on mass media.
- Cashless payment should be mandatory.

また、2学期は文化祭直前ともなると、生徒達も疲労困憊の色が濃くなる時期がある。そういった時期に合わせて、デンゼル・ワシントン主演のディベートを題材にした映画 *The Great Debaters* を見せることにしている。物語は実話に基づいており、黒人大学ワイリー・カレッジのディベート・チームの活躍を描いている。人種差別描写など非常にショッキングな場面もあるが、最後のハーバード大学との対戦場面は感動的であり、チャップリン主演の *The Great Dictators* の最後の演説シーンに勝るとも劣らない主人公 James Farmer Jr.による素晴らしいスピーチを聞くことができる。まさに、ことばの力を実感できる映画であり、英語の教材として優れた映画であると思う。

2学期の評価は、普段の授業への出席状況とディベート原稿など提出物を対象とした。各自のスピーチを原稿として提出させることで、ライティングとしてのアウトプットにも繋げることができたと思う。

2.6.2.4 3学期の授業

3学期は入試などもあり授業の回数が極端に少ない為、授業計画にも工夫が必要である。例年、英語ディベートの他、英語俳句等の Creative Writing に取り組ませるとともに Dead Poets Society in *Tsukukoma* と題して、自作や自分の好きな詩や文学作品等についてのプレゼンテーションを学期末に実施すると共に、原稿をまとめる予定である。

2.6.2.5 今後の課題

英語ディベートの指導に際しては試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいる感が否めないが、生徒の日頃の授業への取り組みの様子から、特にアウトプットに際しての英語ディベートの効果・有効性を実感している。日本の英語教育の変革には英語ディベートの普及とレベル向上が必須であるという信念のもと、今後も授業実践と普及活動に取り組んでいきたい。

2.7 高校3年生(68期)コミュニケーション英語Ⅲ 担当：秋元佐恵

2.7.1 授業目標

6年間のシラバスの中で「発展期」2年目、最終学年の高校3年では、高度で良質な英語を読んだり聞いたりして理解し、その内容や意見を自分の英語で表現することが求められる。ただし高3では「英語表現Ⅱ」という表現中心の選択科目があるため、本授業では読解やリスニングを中心とし、以下の目標を定めた。

① 英文学を味わう

詩やエッセイ、小説、伝記など、古典から現代までさまざまな文体に触れ、その時代背景とともに扱う。原文を読み、内容だけでなく文体の特徴や表現の工夫を意識させることを目標とした。

② ホットな話題を提供する

高3生は行事や大学入試の準備で、ニュースとじっくり向き合う時間がなかなかとれない。時事問題や科学論文が英語で発信されている現在、最新的话题を提供できることが英語授業の重要な役割であり魅力であると思われる。よってこれを2番目の目標とした。

③ 個人指導(添削)する

授業の最後に和訳・要約等の提出課題を課し、添削して返却することを目標とした。これは自分の次の授業の組み立てに参考になるとともに、生徒の授業への取り組みに効果があると思われる。

2.7.2 1学期の授業

上記の3つの目標を掲げ、主に5つの題材を扱った。選ぶ際には、文系・理系取り混ぜて、1つの分野に偏らないようにした。毎回の授業プリントは読解かリスニングの問題形式とし、授業内で解く時間を与えた。なお、生徒が塾等で既読の恐れがあるため大学入試の過去問題は避け、オリジナルの作問を心掛けた。

各単元の配当時間は3～5時間。主な方法は、トピック紹介と語彙導入(パワポでクイズ形式)→問題配布→一部解説→提出→添削→返却・追加解説。

① Hayabusa2

春休み中にホットなニュースとして報じられた話題。本校の八宮教諭が *The Japan Times* の良い記事を見せて下さり、それを生徒に紹介しつつ、NHK『ニュースで英語術』を聞いた。この手の話題には教員よりずっと詳しい生徒がいて面白い。次のホーキング博士の話題のいいウォームアップとなった。

② *My Brief History* by Stephen Hawking

ホーキング博士が亡くなって1年、本屋で著作の特

集をしていた。この自伝は文章が簡潔で美しく、文理問わず興味深く読める内容だった。授業で扱ったのは第1章の子供時代と第9章のALSや声に関する部分。読解後、博士のシンセサイザーの声（本人も気に入っていたとの記述あり）による、未来世代へのメッセージを一緒に聞き、好きな文を暗誦した。最後に、博士が自らアニメにも登場するなどのユーモラスな一面を紹介し、次のトピックに繋げた。

③ The Psychology of Jokes

前回の高3(61期)で評判の良かったトピックで、今回もやることにした。最初に「世界で一番面白いジョーク」(山本 2010)を紹介。次に The Universe of English から、“Why do we laugh?”を扱った。これはジョークの構造を論理的に説明したもので、ちょうど文化祭のコント班の活動を始めた生徒たちがとくに面白そうに読んでいた。最後に簡単なジョーク(Light Bulb Joke)を各自1つずつ作成し、皆でベスト1を選んだ。

④ All Summer in a Day by Ray Bradbury

SF作家ブラッドベリの文は比喻表現が豊かで、生徒が共感できる内容の作品も多い。とくにこの中編は雨の降り続く金星の学校生活の話で、現代で言ういじめ問題も小テーマとして出てくる。梅雨の時期に読むのにふさわしく、文字だけで読者の想像力を刺激してくれる作品である。文体への意識を向けるため、最後に表現がうまいと思った文を、理由とともに書かせた。

⑤ Baseball and a Fact of Life by Bob Greene

ボブ・グリーンのエッセイのなかで普遍性のあるテーマを選んだ。簡潔な文体であるが現在の生徒にもおそらく共感できる内容。タイトルを示さずに読解させ、自分ならどんなタイトルをつけるか、どのようなところに共感をおぼえたか、などを書かせた。

2.7.3 2学期の内容

2学期は1学期および昨年度高2で未習の分野(環境・経済・医学)を問題演習形式でやることにし、10月はラグビーワールドカップの話題、最後に短編をいくつか読んだ。

① Climate Change

Greta Thunbergさんがヨットでニューヨークに渡ったニュースが9月初めに流れたばかりで、彼女のスピーチを扱った。その表現力に圧倒される生徒が多かった。8月末のアマゾン火災のニュースも視聴した。

② Tax system

日本の増税のニュースと共に税に関する経済の話題

をリスニングとリーディングで取り上げた。

③ Genome Editing / Organ Transplant

医学部に進む生徒も一定数いるので、この話題を選んだ。3月にNHK Worldで放送されたGLOBAL AGENDA: Genome Science Editing Humanity's Future(山中教授はじめ4名の専門家がゲノム編集の未来について語る)を主な題材とした。後半はPaul Knoepfler(米生物学者)のインタビューを聞き、最先端の研究と倫理的問題について考えた。ちょうどノーベル賞のニュースが飛び込んできた時期で、吉野彰氏ノーベル化学賞のニュースもここで取り上げた。

④ Rugby World Cup & Nelson Mandela

10月のラグビーワールドカップでの日本チーム活躍の頃、映画INVICTUS(2009)を見せ、アパルトヘイトやネルソン・マンデラ関連の資料を読んだ。映画は1995年南アワールドカップの話で、マンデラの尽力もあり南アフリカが優勝するシーンで終わる。折よく今年の世界カップでも南アフリカが勝ち進み、しかも初の黒人キャプテンが率いるチームでの優勝、マンデラ編曲の国歌をチームが歌うシーンを生徒と一緒に見ることができ、良い締めとなった。

⑤ 英米短編小説

文法項目ごとの和訳練習を何度かした後、短編を3つ読んだ。

- Blue Skies from National Story Project (Paul Auster)
- A Day's Wait (Hemingway)
- The Open Window (Saki)

いずれも最後にTwistのある話で、授業時間内に読んで達成感を味わうことができる。Hemingwayでは文体の特徴を話し合った。なお、授業で短編小説を扱う場合、30分~40分で読み終えるものが良いようだ。普段から800語~1000語程度の面白い短編を探しておく必要がある。短編を読むことが楽しい、と思わせることができれば授業が成功したと言える。

2.7.4 今後の展望

高校3年間英語を教える中で「鍛える」と「味わう」ことをバランスよくやりたい、と思ってきた。生徒に英語力(語彙・文法・読解力・表現力)をつけるとともに、英文学や言語学の面白さの一端でも伝えられれば、ということである。ツールやスキルとしての英語が重視される現在、どのように授業を組み立てるべきか、毎回悩んだ。生徒のニーズに合うものとなると、「鍛える」ほうに重きをおくことになりがちであ

る。しかし結局は自分が内容・文体ともに納得する題材でないと、自信を持って扱うことができない。今後も本校生徒に適した題材を常に探しながら、いずれかの目標に偏らないよう、授業のための教材研究を続けていきたい。

<参考文献>

- Auster, Paul. 2002. *I thought My Father Was God: And Other True Tales from Npr's National Story Project*. New York: Picador.
- Bradbury, Ray. 1990. *A Medicine for Melancholy*. New York: HarperCollins.
- Hawking, Stephen 2013. *My Brief History*. New York: Bentam Books
- Greene, Bob. 1983. *American Beat*. New York: Penguin books.
- Department of English, The University of Tokyo, Komaba. 1993. *The Universe of English*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 大野和基&ジャパントイムズ編. 2018. 『英語で聞く知の最前線 1』東京: ジャパントイムズ.
- 山本史郎. 2010. 『東大講義で学ぶ英語パーフェクトリーディング』東京: DHC.

2.8 高校3年生(68期)英語表現Ⅱ

2.8.1 はじめに

英語表現Ⅱ(2単位)は、八宮と高橋で週1時間ずつ担当し、八宮が主に和文英訳・文法を、高橋はパラグラフ・エッセイライティングを扱った。

2.8.2 和文英訳・文法演習 担当・八宮孝夫

筆者が担当したのは、英語をより正確に書く、つまり accuracy に重点を置いた指導である。詳しくは、個人研究で述べるので、ここでは概要にとどめる。

1 学期は、主な文法項目の復習に重点を置いた。以下の通り:

- 1 比較級
- 2 不定詞
- 3 ing形(動名詞。現在分詞)
- 4 力試し: 羅生門の和文英訳
- 5 受け身, 過去分詞
- 6 that など接続詞
- 7 関係代名詞, 関係副詞
- 8 仮定法

これらは、『NHK ラジオ英会話』(2018年度版)(講師・大西泰斗)で、毎月1つの文法項目をテーマに扱っていたので、それをヒントに分類した。用例、問題もそこで面白いと感じた用例や参考書の用例を取捨選択して組み立てた。

1時間の後半には中。長文和訳を行った。テーマは以下の通り:

- 1 エベレスト登山の三浦雄一郎
 - 2 「シャーロック・ホームズ」ブーム
 - 3 ホテルマンの会話
 - 4 昼ごはんの後の職場
 - 5 となりのトトロについて
 - 6 初デートのゲームセンター
- (毎回はフィードバックできず、6テーマのみ)

テーマだけではわかりにくいのが、エッセイタイプ、会話調、口語的なもの、少し硬い調子のもので、と文体的なバリエーションを考えた。これらは、『NHK 実践ビジネス英語』(2018, 2019年度版)(講師・杉田敏)の The Writers' Workshop というコーナーで出題されたパッセージを中心に組み立てた。これは、実際に「NHK ワールド」英語ニュース番組のライター、リライターである佐藤昭弘氏が複数の投稿者からの例を挙げながら、ニュアンスを含め詳しい解説があるので、教師にとっても非常に有益であるため、採用した。

2学期は、前半はリスニングを取り入れ、その Q & A をもとにサマリーライティングをしたり、基本動詞の用法、ニュアンスの違いなどに焦点を置いた。

- 1 リスニング 1 A Wildfire in Brazil
- 2 基本動詞 (see / look / watch / stare / gaze)
- 3 基本動詞 2 (show / teach / instruct / suggest)
- 4 リスニング 2 Student Loans in the USA
- 5 基本動詞 3 (let / allow / permit / insist)
- 6 基本動詞 4 (find / regard / recognize)
- 7 リスニング 3 Keeping Fire Ants at Bay

基本動詞は、『NHK ラジオ英会話』(2019年度版)(講師・大西泰斗)の6月号~10月号で基本動詞を扱っていた。特に興味深いのは、「レベル2動詞」と呼ばれるもので、例えば see / look / watch の意味・用法の区別はしばしば授業でも触れられるが、この次の基礎をなすレベルの動詞 stare / gaze / glance となると、必ずしも意味・用法を確実に把握しているとは言えない。回数は限られ、網羅することはできないが、SVOCのパターンを取る動詞を中心に、扱うことにした。リスニングは、やはり時間が限られており、長いものは扱えない。『世界へ発信! ニュースで英語術』で扱うニュー

スの聞き取りは1分以内で時事的なものも多く、それを中心に扱った。ただ、終盤は長文の解説に時間を取られ、中途半端な形の展開に終わってしまった。

後半は長文和訳の解説中心である。扱ったのは以下の通り：

- 1 コンピュータ、人工知能
- 2 ベンチャー企業の立ち上げ
- 3 侍ドラマのシナリオ
- 4 『ピーナッツ』とチャーリーブラウン
- 5 AIの問題
- 6 高校3年間で印象的な出来事

1学期に比べて、扱う分量が増え、2時間にまたいでしまったこともあり、テーマとしては1学期ほどは扱うことはできなかった。また、6は和文英訳でなく、最終回に行った自分の体験の口頭発表である。

2学期間を通じて、日本語の字面に引っ張られず、いかにしてその内容を(構文などがすっきりとした)自然な英語で表現するか、いわば、ものの見方、考え方に重点を置いてきたと言える。

具体的な展開は、個人研究で述べることにする。(参考文献も、まとめてそこに記す)

2.8.3 パラグラフ・エッセイライティング

担当：高橋深美

毎回「説明文を書く」「意見を書く」等のテーマを決め、それぞれに合う課題を与え、短いものは30語程度、長いものは70語程度の文章を書かせた。

生徒が書いた作文は筆者が添削し、良いものは印刷して皆で共有した。テーマとして取り上げたのは以下の通りである。なお、テーマによっては数種の問題を数回にわたって取り上げたものもある。

- ・日本の名所、作法について説明文を書く
- ・社会問題について意見を書く
- ・ある事象について Yes / No の両方の立場で意見を書く
- ・情景描写をし、会話を作る
- ・文章の続きを作る
- ・戯曲の一節を読んで考えを書く
- ・古典の内容を英語で表現する

最初の数回は文章の構成の仕方と、いかに無駄な語を使わずに文章を書くかに焦点を当てた。例えば30語程度の文章で、I have two reasons for this. などと書くとそれだけで6語消費するので、このような無駄

な一文を省き、理由を列挙する場合、直ちにFirst..., から始めるような指導を行った。

また、日本の文化の中で育った生徒たちであるので、どうしても問題の周辺を語り、なかなか本題に入らなかつたり、個人の意見を一般化したりする傾向が強く、“Get straight to the point.” “Don’t use ‘we’ but ‘I.’”等は繰り返し強調した。

以下に2学期半ばに使用した問題と生徒の作品例を挙げる。

問題：次の、シェイクスピアの戯曲『リア王』からの引用を読み、その内容について思うことを30～40語で述べよ。(授業で使用したプリントには日本語訳をつけてある。)

Edgar: Shall I hear from you anon?

Edmund: I do serve you in this business. [Exit Edgar.]

A credulous father, and a brother noble,
Whose nature is so far from doing harms
That he suspects none; on whose foolish honesty
(Act 1, Scene 2)

生徒の作品

As it is stated here, honesty, which is generally regarded as an advantageous trait, is a double edged sword. <Just> being honest isn't always (the right choice) <enough>. (and) I believe some kind of cleverness is <also> required in order to live a successful life.

(42 words)

I agree with the idea that good people cannot suspect other<s>. Since they've never thought (to harm)<of harming> others, they cannot expect to be (damaged) <deceived>, assuming all people in the world are (good people) <good-natured>.

(31 words)

()内は削除, < >内は加筆として添削している。

時にはなかなか筆が進まないような問題を課したこともあったが、授業の進行に伴い、概ね指導の目標は達せられたものと考えている。

3. テーマ学習および課題研究における取り組み

3.1 概要

本校では生徒の主体的な学びを育む一環として、中学3年生の総合的な学習の時間にテーマ学習を設定している。また高校2年生において、学校設定科目課題研究、または理科課題研究（各1単位）のうち一方を選択して全員が履修することとしている。

3.2 中学3年生（71期）テーマ学習

担当：阪田卓洋

『Science Dialogue Jr.』というタイトルで、3つの内容 ①海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語での講演を聞き、質疑応答などでコミュニケーションを図る、②英語でのプレゼンテーションを各自でテーマを設定して行う、③様々なトピックについて英語で議論する機会を設ける、について取り組んでいる。①の講演内容については、講演者による実験や映像等を併用した上手なプレゼンにより、大体的内容は理解できているようである。生徒には、毎回（講演者は異なる）講師に1人1つは質問をすること、アンケートのコメント欄に講師へのメッセージを英語で書くことを奨励している。

また、今年度は『学校紹介 in English』を同時並行で進めている。班ごとに日常の何気ない風景を動画で撮り、そのシーンに英語のナレーションをつけて、1分半程度の学校紹介ビデオを製作している。3学期に動画編集などを進める予定である。



Science Dialogue でのグループディスカッション

3.3 高校2年生（69期）課題研究

担当：多尾奈央子

高2課題研究では、日本学術振興会の『サイエンス・ダイアログ』プログラムを活用し、海外の若手研究者

から自国の文化や専門分野について英語による講義を聴講している。発表内容を聴講することを主たる目的に終始せず、発表の仕方に注視し、学術的・専門的な内容を聞き手に応じて分かりやすく伝えるプレゼンテーション力を修めることをねらいとしている。

サイエンス・ダイアログでのプレゼン例受講と並行して、生徒一人一人が各々主体的にテーマを設定し、研究成果を発表する機会を3学期に設けている。12月の回では、それぞれの研究テーマに従い、本発表のリハーサルとして受講生相互にレビューをした。その際、英語を日常に学問研究で使用している外国人講師をも聴取者として迎え、内容および発表について助言をいただいた。受講生同士の相互レビューに加えて、外国人講師の助言を基にブラッシュアップさせ、1月中旬に本発表を迎える。本発表の主たる聴取者は下級生の中3生・高1生であり、異学年での学び合いの場となる。講座開始早々から、本講座の最終目標「プレゼン能力を高める」「内容について知識を持たない聴取者にもわかりやすく伝える」ことを踏まえ、より緊張感をもって研究と英語での発表に向けて真摯に取り組むことを念押ししたが、これにはリアルな場数を踏むことがやはり大事であることが強く実感される。

何に置いても「研究発表」となれば、題目を決めることが最も難しい。かと言って、担当者より題目選定に提案や制限を設けてしまうと、主体的な研究にはならない。ひいては発表時の説得力に欠けてしまう。題目設定までがもっとも時間がかかり、困難を伴う段階であるが、今年度も何とか受講生自身でテーマ設定し、年度末の発表に向けて準備を進めている。テーマが選定されれば、担当者としては研究から発表までを生徒の主体性に預けるだけではなく、細かく進捗状況の報告から受講生同士での質疑応答（英語による）の回を重ねることで研究内容を着実にrefineさせること、発表までの自信をつけることが留意点であった。

表 1. Science Dialog & DIY 年間計画（全35校時）

Date	Speaker	Topic
①May 11	—	全体オリエンテーション
②June 1	—	講座オリエンテーション
③June 15	各受講生	テーマ構想協議
④June 29	Science Dialogue 講師 #1	
⑤July 8	各受講生	構想発表
⑥Sep. 21	各受講生	研究進捗状況報告①
⑦Oct. 5	Science Dialogue 講師 #2	

⑧Nov. 16	Science Dialogue 講師 #3	
⑨Dec. 6	各受講生	研究進捗状況報告②
⑩Dec. 16	各受講生	native 講師による指導
⑪Jan. 11	研究発表①	
⑫Jan. 25	研究発表② (中3・高1に向けて)	
⑬Mar. 9	総括	

4. 国際交流に関する取り組み

4.1 概要

本校はスーパーサイエンスハイスクール (SSH) として、海外の高校などとの研究交流実績を上げてきた。また 23 年度より筑波大学はその附属学校に対して、「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会は確実に増えている。

以下に、2019 年度の国際交流活動 (予定を含む) を挙げ、いくつかについて説明する。

<*は SSH 関係>

- (1) *台湾台中市立高級第一中学訪問
- (2) 釜山国際高校・KSA (韓国科学アカデミー) 訪問
- (3) International Students Science Fair 2020 への参加
- (4) イングリッシュ・ルーム

また、訪問受け入れとしては以下のとおりである：

- (5) 台湾台中市立高級第一中学より本校訪問
- (6) 釜山国際高校から本校訪問
- (7) 筑波大学外国人教員研修留学生、音楽祭・文化祭参観。

一昨年までは、横浜サイエンスフロンティア高校や立命館高等学校など、SSH 重点校との提携プログラムがあったのであるが、諸々の事情からそれらのプログラムがなくなり、少し寂しいことであるが、逆に、(7)の筑波大学外国人教員研修留学生との交流では、これまで行事の最中の来校で、実質的な交流がなかったことを鑑みて、今年度は、中学の授業に来てもらい、生徒たちと文化交流を行う予定である。中学生の国際プログラムはこれまでなかったもので、その点画期的といえる。

4.2 台中一中訪問

6月に台中一中派遣生徒を募集し、担任団が選抜、7月の終業式後に、初顔合わせをして、高2の10人が1本の研究発表をし、高1の6人が学校紹介をすることに決まった。また、今年度は、高1生も、個人研究をし、ポスター展示・発表という形で一歩踏み込んだ参加をすることになった。

2学期は、個々の研究チームごとに課題研究の担当教員が顧問となり研究を進めた。11月中旬にA4判2ページの英文アブストラクトを提出させ、「アブストラクト集」にまとめた。タイトルは以下の通り：

- 1 Unique Inscribed Polygons and Its Features
- 2 Consideration of the Langley's Problem
- 3 Value Independent of Polygon Division
- 4 What Is the Best Road Network?
- 5 IoT Development: Home Automation with ESP32
- 6 Problems of GPS Investigation
- 7 Think about Mercury Pollution
- 8 Living Together in Harmony

~Designing comfortable station for everyone~

また、高校1年生の個人研究テーマは以下の通り：

- 1 On Sums of Binomial Coefficients
- 2 English Education Seen from Students
- 3 Beautiful Relations
- 4 Influence of the popularity of tapioca drinks on the production and distribution of raw materials
- 5 Causes of Broken Escalator Phenomenon
- 6 Amount of Pea's Sprouts Regeneration

期末考査後に、Mr. and Ms. Vierheller によるプレゼン講習を行った。プレゼン講習で Mr Vierheller が強調したのは、「聴衆は発表内容について全く知らないのだから、そのことを考慮してプレゼンせよ」ということであった。確かに、生徒は自分のプレゼンテーションを行うことに夢中で、相手にわかってもらうという視点に欠けていた。事前にその点に気づいたのは大きな意味があった。また、注意すべき要素として「Numbers / Question words / Adjectives / Negative words」をあげられた。

12月10日~15日、台中一中派遣を実施し、2日間にわたって、研究交流会を行った。なお、その内容については、別途『台中一中派遣プログラム2019実施報告書』にまとめる予定なので、それを参照されたい。



ポスターセッションの様子

4.3 プレゼンテーション・ワークショップ

英語科では、上記の台湾派遣生徒向けを含め、Vierheller 夫妻を講師に招いたプレゼンテーション・ワークショップを年3回、開催している。

- ① 1学期末：中級者対象
- ② 2学期末：台湾派遣生徒対象
- ③ 3学期末：初級者＋韓国派遣生徒対象

1学期末の“Learn to Present”と題された講座には主に中3・高1の生徒約20名が参加し、グループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるさまざまなスキル、具体的にはスピーチの声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについてであった。2学年から成る各グループは協力して原稿を作り、発表をしながらその都度、指導を受けた。

異なる学年での交わりや、話し方に関するアドバイスなどは、普通の授業ではなかなか経験できない取り組みである。3学期には例年通り、中1・中2対象の「ビギナーズ用ワークショップ」も開催予定である。

4.4 イングリッシュ・ルーム

イングリッシュ・ルームとは、東京大学の大学院留学生等を招いての英会話練習の実践の場である。通常は月に2～3回の平日放課後1時間半程度で、その日に来た生徒に合わせて相手をしてもらっている。また、中3テーマ学習・高2課題研究の「サイエンス・ダイアログ」では生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導、語学部のディベート指導にも活用している。



イングリッシュ・ルームの様子

4.5 おわりに：今後の予定

今後、1月16日に釜山国際高校生の本校来校、3月に本校生徒の釜山国際高校・KSA派遣プログラムが予定されているが、台中一中の場合と同様、プレゼン発表を行うので、引率教員が中心となり指導をしていく予定である。